最終回

池上彰のトップの読書術

高濱正伸

花まる学習会 代表

後編

一世を風靡した「フィンランド教育」の嘘

活字アレルギーから一転、〝本の虫〟に

池上 高濱さんは、いつごろから本好きになられたんですか？

高濱 僕は完全に〝遅い派〟です。僕は3人きょうだいの真ん中なんですけど、2歳上の姉がすごい読書好きで、学校の図書館の本は全部読んだと噂になるくらい、本当に読んでいました。きょうだいにそういうスーパーマンみたいなのがいると、迷惑なんですよね（笑）。いちいち比較されちゃうから。

池上 で、読書が嫌いでした？

高濱 苦手で……、夏休みの宿題の読書感想文なんか8月31日の夜になって、泣きながら目次だけ見て書いていました。課題図書とか全然面白くないし、地獄だなと思っていました。

池上 それが、どういうわけで？

高濱 思春期になって恋や友情に悩み、いろいろ内省し始めたころに、年長の従兄弟から北山修さんの本を勧められたんですよ。読んだら、本当に信じられる大人の言葉がスーッと入ってきて。あれは、中学1年生になった4月のことで、『戦争を知らない子供たち』という本でしたね。

池上 はいはい。

高濱 ちょうど母親なんかの干渉にイライラするころで。そういうことに対しても「こっちが思いやるべき年齢になったんだ」ということが書いてあったりして、「なるほど」と。そこからすごくシンパシーを感じたというか、活字を愛せるようになったんです。

池上 活字アレルギーがなくなった。

高濱 はい。筒井康隆さんも大きかったですね、入り口として。そこからは一気に活字の世界に没頭しまして。それこそ授業中もガーッと読みふけるような……、ドストエフスキー、トルストイ、チェーホフなどに相当ハマって、気付いたら国語が得意になっていました（笑）。

池上 それはそれは。さあ、そして今回挙げていただいた本は、依田紀基さんの『どん底名人』ですね。今、それこそ、囲碁や将棋がブームになっていますけど。

高濱 ブームになってきたのは、ありがたいですね。僕は、もともと知的な訓練という意味で、囲碁や将棋を学校の正課に取り入れる、それだけで算数力が上がると思っています。

池上 なるほど。

高濱 この本はたまたま読んで感動してですね。それこそ言いたいことはいっぱいあるんですけど、依田さんは学生時代、通知表はオール1なんです。いわゆる劣等生ですよね。でも、ある世界のトップにちゃんと立っているじゃないか、と。この人、恨んでますよ、学校を。

池上 朝から晩まで囲碁のことばかり考えていたから、学校の勉強のことなんて考える暇がなかったという。

高濱 そういう意味でも、日本の学校というのは、特別な才能が生まれたときに潰してしまうようなところがあるのではないかと。

一番言いたいのは、この本は、父親と高校生以上になった息子が一緒に読むとすごくいいんじゃないかと思うんですね。囲碁にのめり込むのはいいけど、女とか酒とか博打とかにのめり込むと、こうやって転がり落ちていくんだぞって、リアルな体験談も飾らない文章で書いてあるから。父子で読むと、勉強になるんじゃないかと。

Akira Ikegami
ジャーナリスト、東京工業大学特命教授。1950年、長野県生まれ。慶應義塾大学卒業後、73年にNHK入局。94年から『週刊こども『ニュース』のお父さん役として活躍。2005年よりフリー。

→ 著者は、経済、社会、教育の問題をテーマに取り組んでいるジャーナリスト。全国学力テストに代表される点数至上主義に流されず、本当の意味で子どもを成長させる授業を追い求める教師たちの奮闘を追う。

池上 ご自身も浪人と留年を繰り返しているから。

高濱 そう、伝わるものがありました（笑）。

「教育改革」はなぜうまくいかないのか

池上 前屋毅さんの『ほんとうの教育をとりもどす』。こちらも高濱さんお勧めの本ですが、これはまさに教育の話ですね。

高濱 教育ってですね……、僕も長年、教育の現場にいて思うのは、誰でも自分が親から受けた教育とか、自分の教育の仕方とかは、言いやすいからいろいろ言うんですよね。

池上 そうなんですよ。

高濱 「2人の子どもを○○大学に入れた」とか、経験だけを語っているようなことがよくあって。それはそれで貴重な体験なんですけど、僕なんか何万というケースを見ているわけです。そうすると、もう本当に「こうすればいい」って解は、なかなかないんです。

池上 そうでしょうね。

高濱 でも、メディアってすぐ「○○式教育」って出てくると、バーッと飛びついてニュースにするでしょう。

この本がすごいのは、ジャーナリストが教育現場へ行って丹念に取材をしているところです。「教育の改革」とぶちあげるのは簡単なんだけど、「なんだ、あれだけニュースになったのに凡庸な教育に戻っちゃってるじゃん」というようなことがしっかりと書いてあります。

池上 私も昔、文部省（現・文部科学省）の記者クラブにいまして。

高濱 そうですか。

池上 ちょうど臨時教育審議会ができたとき、ずっと取材していたんですけど。だいたい10年に1回、学習指導要領が改訂されるんですが、これから10年の方針を立てるために、まず中央教育審議会というのが開かれるんですよ。その中教審の委員に、必ず文部省のOBと、ジャーナリストの年配の論説委員と、スポーツ選手が選ばれます。

高濱 はいはいはい。

池上 議事録を見るとですね、みんな順にただひたすら自分の受けた教育の話をしていて。

高濱 そうなんですよ。

池上 あのころに比べて最近の子どもたちは……、みたいな。

フィンランドで見てきたもの

高濱 だから今ようやくね、データをとってエビデンスをもとにって始めたんですけど、エビデンス主義も、僕はちょっと教育の現場では違うと思っているんですね。

もう本当、教育って変わりきれてないと思うんです。「フィンランド教育は素晴らしい」なんて本も出てるけど、嘘ばっかり。

池上 いや、私もフィンランドに取材に行きました。「フィンランド・メソッド」なんて本が出ていますけど、いや、そんなものないぞ、と（笑）。

高濱 ないんですよ。

池上 やっぱり、「フィンランドはなんで学力が高いんだろう？」と思っているときに、そういう本が出ると飛びつくんですよ。

高濱 いや、ほんと。

池上 行ってみたら、何て言うのかな、とくに新しい発見はなかったですよ。

高濱 ですよね。

池上 ああ、やるべきことをやっているだけだ、と。

高濱 本当にそうだと思います。やっぱり先生が授業内容に大きな裁量権を持って、ちゃんと結果に責任をとっていくということだけやれば。

池上 そう。先生に教材研究をやる時間のゆとりをあげているんですよ。

高濱 そうなんです。教師自身が何をやっても、ある程度いいんですよね。そこがポイントなのに。

池上 いやあ、よかった、よかった。ちゃんとそう言ってくれる人が現れた（笑）。

高濱 いやあ、僕より、ちゃんと取材をしてきたジャーナリスト・池上さんの双肩にかかってますよ（笑）。 P

Masanobu Takahama
1959年、熊本県生まれ。県立熊本高校、東京大学農学部卒業、同大学院農学系研究科修士課程修了。93年、「メシが食える大人に育てる」という理念のもと、学習塾「花まる学習会」を設立。『伸び続ける子が育つお母さんの習慣』など著書多数。

八村晃代＝構成　相澤 正＝撮影（人物）
早川智哉＝撮影（本）

BOOK DATA
ほんとうの教育をとりもどす
前屋 毅 著
共栄書房●本体価格1500円＋税